

平成30年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 小倉中央 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

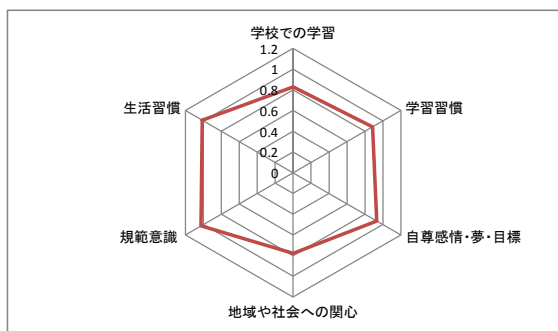
(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	全体的に全国平均正答率を上回っている。特に学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う問題や、文の中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書く問題は正答率が高かった。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よってきた問題	登場人物の心情について、情景描写を基に捉える問題や日常生活で使われている慣用語の意味を理解し、使う問題は正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	目的に応じて必要な情報を捉える問題の正答率が低かった。	
国語B	全体的な傾向や特徴など	全体的に全国平均正答率を下回っている。話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる問題の正答率が低かった。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	目的に応じて、複数の本や文章などを選んで読む問題は正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながら読む問題は、正答率が低かった。	
算数A	全体的な傾向や特徴など	全体的に全国平均正答率を上回っている。特に除法で表すことができる二つの数量の関係を求める問題や、1に当たる大きさを求める問題場面における数量の関係を理解し、数直線上に表す問題の正答率が高かった。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よってきた問題	小数の除法の意味についての問題や、百分率を求める問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	180°や360°を基に分度器を用いて、180°よりも大きい角の大きさを求める問題や、直径の長さと同周の長さの関係について理解を求める問題の正答率は低かった。	
算数B	全体的な傾向や特徴など	全体的に全国平均正答率をわずかに下回っているが、メモの情報とグラフを関連付け、総数や変化に着目していることを解釈し、それを記述できる問題の正答率が高かった。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	示された考えを解釈し、条件を変更して考察した数量の関係を、表現方法を適用して記述できる問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	合同な正三角形で敷き詰められた模様の中に、条件に合う図形を見いだす問題の正答率が低かった。	
理科	全体的な傾向や特徴など	全体的に全国平均正答率を下回っているが、全国平均に比べて無回答率が低かった。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	電流の流れ方について、予想が確かめられた場合に得られる結果を見通して実験を構想できる問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	人の腕が曲がる仕組みを模型に適用できる問題や、太陽の1日の位置の変化と光電池に生じる電流の変化の関係を目的に合ったものづくりに適用できる問題の正答率が低かった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析	
・学習習慣について、家で学校の宿題をしている児童の割合は全国平均を上回っている。自分で計画を立てて勉強をしている児童の割合は全国平均を下回っている。家庭学習の充実に向けての取り組みが課題である。	
・学校の決まりを守ったり、毎日同じくらいの時刻に寝ている児童の割合が全国平均を上回っている。	
・授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる児童の割合や学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている児童の割合が低い。さらに授業改善に取り組み、教師の授業力を向上していく。	
・今住んでいる地域の行事に参加している児童の割合が低い。生活科や社会科、道徳科などの授業を通して、地域愛を育み、社会への関心を高めしていく。	

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> ・全学級の授業改善に取り組み、教師の授業力を向上していく。 ・学習補充特設時間を継続して実施する。また、各学年・各学級の実態に応じて、算数を中心にT2指導を行う。 ・各教科の学習において、友達と話し合う活動を取り入れて、友達と交流しながら学びを深めたり、小中連携の取り組み(ノート交流・話し合い活動の系統性・出前授業)を推進したりしていく。
--

② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> ・「家庭学習チャレンジハンドブック(活用編)」を全校で活用して、授業以外の勉強時間の増加への意欲を高める。また、学校・学級通信、学級懇談会等を通じて、家庭への学習時間確保の啓発を行い、保護者と連携した取組を行う。
--